

# 「好色一代男」の修辞法三題

島田勇雄

## (一) 固有名詞

その一 まえおき

日本語の文法では、固有名詞という品詞は通常認めない。それは西欧文法の用語の流入の結果生じた常識的用語である。なぜ固有名詞を一品詞と認めないかと言うに、それは職能中心主義の文法論の見地からは一品詞として認めるに足りるような独自の文法上の職能を持たないからである。それで、通常固有名詞は名詞に包含させておく。名詞の一種と考えておくわけである。日本語では、英語などのように単語の第一字を大文字で書くというような表記上の特別なきまりもないので、それについて特に解説することほとんどしない。固有名詞は常識

的用語であつて文法上なら特別な点も見られないような語群であると解説するにとどめるのが通例である。品詞としての性格を語意・語形・語法の三側面にわたつて考慮する立場に立てば、固有名詞は語意の点で特徴を持つ語群である。通例名詞に包含されるものの中でこれに近いものに、代名詞・数詞などがある。ともに、その修辞法上の職能に特異なものを持つ。代名詞の指示的用法については近來殊に留意されるようになったが、固有名詞や数詞の修辞的職能については今もさして留意されないように思われる。

同じく名詞の中に含める語であっても、普通名詞と固有名詞とは、質的な差違が認められる。たとえば、魚の名である。魚にはどんな魚でも名がある。魚の名は普通名詞である。即ち、魚の名は、どんな魚の名でも、魚類学的特徴その他の点で同類

と認められるものは残らずその名で表現することができる。また同類中の特定の固体を同類中の他から区別するための名というものはない。そのように、同類に属するものを残らず包含するという類が普通名詞である。魚の名・草の名・鉱物の名、それらはことごとく普通名詞である。それに對し、固有名詞は、同類中のある特定の固体を他から区別するために与えられた名である。たとえば芥川龍之介の「トロッコ」において主人公を「良平」と命名しているが、それは固有名詞であり、もしその主人公を「少年」と呼ぶことにしたら、それは普通名詞である。普通名詞の「少年」は一定の条件を備える者は全てそれに含めるが、固有名詞の「良平」はその名の与えられた者を他から特立させるものである。したがって、この主人公を「少年」と呼ぶことにする場合と、「良平」と呼ぶことにする場合とは、まず作品の主人公に対する称呼を異にするようになるが、そのことは引いてはその作品が少年一般を主人公にするか、もしくは特定された「良平」を主人公にするか、という差違をもたらす結果になり、作品の性格を大きく左右することになる。つまり、主人公を普通名詞の「少年」で呼ぶ場合、その主人公は少年一般という性格が与えられることになり、引いてはこの作品は少年一般について彼が特定の情況を与えられた場合、そ

れに反応して行動するであろうと作者の想定した軌跡の一つとそれに伴う心理的変遷とがこの作品の主題となることを意味する。それに對し、この作品のように、主人公に「良平」という名の与えられている場合は、「良平」という特定の人物が行動したことの軌跡とそれに伴う良平における心理的変遷とがこの作品の主題となるわけである。

その作品の主人公に對し主として普通名詞を使用して固有名詞を使用しない作家がある。たとえば大江健三郎・野口武彦などである。それに對し主人公に固有名詞を与えることをする作家がある。これは名を挙げるまでもなく大多数の作家がこれに属する。もともと芥川龍之介のように両者を使い分けることもなされる。芥川は「トロッコ」では主人公を「良平」と命名するが「羅生門」では主人公を普通名詞「下人」で表現する。「羅生門」において主人公を普通名詞で表現する場合と固有名詞で表現する場合とは、作者の對象に対する視点に大差の認められることは言うまでもない。そのように主人公を普通名詞で表現する場合にもその文学的見地には種々の場合のあることは予想できるが、たとえば大江健三郎の場合などでは、それは単に文体上の異を立てるというものではなく、最も基本的には文学上の原点において大きな特徴があるといふべきなのである

う。そこには普遍的な人間一般における諸問題が作品の対象とされていることができるのであろう。それに對し固有名詞を使用する方の側は、たとえそのような観点が基本にあつたとしても、常に具体的な特定の人物における諸問題に還元し、その次元において作品の対象とされていると言ふことができるのであろう。そのことを、固有名詞の使用如何の基本とするなら、固有名詞の使用にはそのことに附随するなお若干の固有条件があるということが出来る。その一つに實在感の有無ということを挙げる事が出来る。

作品中の人物に固有名詞を与えるということは通例行なわれていることであり、その命名行為はその作品の中でそれぞれ的人物を特立させて他から弁別することを主目的としてなされるものである。しかしそれは、根源的には現實の日常生活の中で全ての實在の人物は固有名詞を持つてゐるという事實に裏付けられるものである。名を持つという事は、人の世に實在するということのアカシでもある。作者の側でも説者の側でも、そのような日常生活的知見に立って作品中の固有名詞に対応するのであり、またそれが文学と現實とを結ぶ接点の一つであると言ふことさえて出来る。固有名詞の与えられた人物の存在は、したがってその人物の實在を示唆する。その人物は最低限その作

品的空間において實在すると言ふことができる。当該人物の實在という事は、ひいてはその人物に関連する事柄が、たとえばその人物の行動とか心理とかが仮空の現象ではなく、ある種の客觀的事實に基くものであることを示唆する。即ち、作品中の人物について固有名詞を使用することは、当該人物の實在を示唆し、その人物についての叙述は、同時に實在の人物に関する叙述であることを予想させることによつて、それが客觀的事實に基くものであることを示唆すると言ふことができるであらう。それが具体的作品において固有名詞を使用することの附隨的条件であると私は考える。

具体的な作品において、登場人物について固有名詞を使用する場合、作家の側においても説者の側においても、意識するとならないと問はず、そのような表現効果を予定するものであると考えられる。そのことは、現代の作品について妥当するのみならず、古典、たとえば「一代男」の如きにおいても妥当するものであると考えられる。右のような認識に立って抽出する固有名詞の職能を固有名詞の修辭法と呼ぶことにしたい。ついでに言へば、「好色一代男」は固有名詞を使用する作品であり、「好色一代女」は固有名詞を使用しない作品である。両作品は固有名詞を使用するのと使用しないのとの効果を持つてゐる。

## その二 「世之介」について

「好色一代男」における「世之介」のあり様については別稿を予定している。委細はそれに譲ることにして、今はあらましを述べるにとどめる。「一代男」の各章はそれぞれ別個の叙事文であると考えることができる。叙事文では時称・所称・人称がその基礎的三要件であると考えられる。これを知名のお伽噺の冒頭で言えば、「昔、昔」は時称であり、「ある所に」は所称であり、「おじいさんとおばあさん」は人称であると言える。

そのように、叙事には叙事の行なわれた時点があり、叙事の行われた空間があり、叙事の主体になった者がある。「一代男」ではその時称には「貞享何年」のような客観的時日が使用されず、世之介の年齢で根幹が示される。時には「九才の五月四日」の如く、年齢と月日の組合せで表現されることもあり、時には肝心な本文には年齢が全く示されず、単に各巻首の目録の年立に示されるに過ぎないということもある。ことに巻五以降の後編の諸章ではそうである。巻四末までの前編では世之介の年齢に応じて本文中の主人公の行実などが配慮されるということも多く見られるが、後編では年立に、章次としての職能をも含めて表現させるが、本文中の主人公は全く年齢に拘束されない。そのこと

は、それらの諸章が世之介の年齢ということについての配慮のなかつた段階における編纂であつたことの可能性さえ推測させる。余談ながら、私は、「一代男」はかなり迂余曲節を経て現在の形態に落着いたものであり、それらの経緯は現作品の分析から引き出すことができるはずであると考えている。たとえば、世之介の年齢についても、それへの配慮のなかつた段階とそれへの配慮の生じた段階ということを考え、そのことが編纂時の前後を示唆するものと考えてみたいと、目下は考えている。その考え方からすれば、後編の諸章は相当早い時期の編纂になるものであると考えることができるし、その点では結論的には吉江久弥氏の成立経緯に関する所説に近いと言ふことができる。

次に、所称は「一代男」の各章では重要な情況設定の一つとなる。世之介は常に居所を変え、その居所の変化は本文前部において世之介の旅において結果する。旅といつても同じ都の内部におけるような近距離にすぎないこともあるし、京から江戸へというような遠距離のこともあるが、それらを全て旅という語で代替させる。謡曲では「諸国一見の僧」が行脚の結果某地に到着し、その結果として前ジテに邂逅するが、「一代男」では世之介は旅に出掛け、時にはその途中経過が種々描写されることもあるが、結果的には主たる人物に邂逅する点は謡曲と軌

を一にする。それで私は謡曲との対比から「一代男」の各章を検討し、世之介を謡曲における「諸国一見の僧」に類比させようと考える。「諸国一見の僧」が謡曲においてワキであるように、世之介は「一代男」の主人公ではなくワキ役であると考えるわけである。それは余談である。

所稱は、通例各巻首の目録の年立の下に挙げる副題によって示される。世之介の居所は每章絶えず変化する。その変化にはとりたてて法則はないように思われる。本文後部に現われる後ジテの存在に合わせて本文前部で世之介が旅をするまでであると言つてよい。したがつて各章とも前後の章とほとんど無関係で、世之介は全く思い付きの旅に出る。ところが、ある章群だけ前後の諸章が緊密に連結している。三ノ五「集礼は五刃の外」から四ノ三「夢の太刀風」までの六章である。三ノ五は越後の寺泊り、三ノ六は酒田、三ノ七は塩釜、四ノ一と二は信州追分、四ノ三は東北の寒河江というふうで、これらだけから言えば、越後の寺泊りから東北を経て信州に入り更に東北に戻るという順になる。このような章群はほかにない。これらの章群では種々の点で共通する編纂上の方針が見られる。第一に世之介の名と年齢とが本文中に使用される。第二に前章の本文の内容を次章の章首で承けるように配慮されている。第三に本文後部で主

題となる職種が素人でも半<sup>くろく</sup><sup>く</sup>人でも社会的には最低層に属すると言つてよい点である。そのように地理的条件の外にいくたの共通点のあることから、これらの諸章は近しい時期に編纂したものであることが考えられる。これもまた余談ながら、年齢的表現の点からすれば、後編が比較的早い時期に編纂されたことれば、それとは反対に前編は比較的遅く編纂されたこととができるかも知れない。即ち、時称・所稱・人称の点で不完全なものが早く編纂され、より完備したものが遅く編纂されたというふうに、目下の段階では考えようとしていくわけである。

次に、人称の点では普通「世之介」と表現される。一ノ四「袖の時雨は懸るがさいはい」だけでは「浮世の介」である。なぜそうなるかについては今は定まった考えがない。なお各章における人称の型という点では、「世之介」を用いる章群、「世之介」を用いず世之介の年齢を挙げることによつて世之介の存在を示唆する章群、「世之介」の名も年齢も示さずして挿絵中に世之介と覺しき人物を挿入することで代替する章群に分れる。これらのはか、若干例外的な章があつて、これらの章群の中に混入している。これら例外的な章を、どれかの編纂段階に混入したものと考えれば、「一代男」の人称は若干の類型に分かれ、それらの類型はそれぞれ章群を形成していると考えることができ

それらの章群では、人称の表現において一致するだけではなく、そのほかにも素材の種類とか語法的な点とかに多くの共通点を持つ。それで、それらの章群のそれぞれは比較的に近い時期に編纂されたものであらうと思われる。一ノ四と四ノ三とは、章群は相違するが、ともに世之介の名と年齢とを表現し、その点では共通した点を持つ類である。それらが大きく離れた位置に配された章なのに、若道の契の件を共通に持っている。そのように前後の章相互に呼应関係の見られるのはこの二章に限る。そのことも、人称について同様の形式を持つ章群はほぼ同じ時期に編纂されたのであらうとする私の推定を裏付けるものと考へることができらであらう。

以上のように、人称について同様の形式を持つような章群は（それ以外の共通点を含める）ほぼ同じ時期に編纂されたのであらうということをも、「二代男」の成立経緯に関する私の第三の仮説として提出する。これによって、「二代男」は数章のグループずつ幾回かに分けて編纂されたのであらうとの編纂経緯説を私は問題提起してみようとしているわけである。第一仮説は創作方法の基本に関する仮説であり、編集経緯に関してもいふようなことが考へられる。第二仮説を成立経緯に関するものとするなら、第三仮説は編纂経緯に関する仮説であり、どんな順

序でそれが編纂されたか、どの章群が早く編纂され、どの章群が遅く編纂されたかなどのがこれに関連する。これらについてはまだ十分の予測は立たない。そのほかこれに関して考慮すべきことは多いが、それらについての解決は今後のことであり、私は今やつとこのような段階にまでたどりついたわけである。

私の第一の仮説は、みずから編集説と命名した。従来は、一般に「一代男」は序章以来順々に書きおろされて出来たと考えられていた。それを書きおろし説と私は命名した。書きおろし説では解けないような矛盾や不備がこの作品には多い。そのことから谷脇理史氏が新説を出された。それは、「一代男」の創作以前に、西鶴はいろんな素材によって転合書を書いておいた。

それらは素材の差から三都遊里物、地方遊里物、地女物に三大別でできる。それらの中から、「一代男」の一章分の長さになる部分をとり出し、それらに世之介に関する記述などの必要な改稿を加えるなどし、それらを総合して現「一代男」が成立したのであらうと考へられた。これを私は改稿説と命名した。ほぼこの見地に近いものに堤精二氏・吉江久弥氏の所説が挙げられる。私はそれに深く影響され、それを仔細に吟味するところから出発した。その吟味を語法上の吟味を中心に行なった。その

結果谷脇氏は検討の単位を一章単位にされたが、もつと小さい単位、たとえば本文中の一段落ぐらいを基準にしてみる必要を感じた。そのようにして検討した結果、後編の六巻を中心とする諸章に一段落単位の無時制文の散在することを発見した。無時制文は叙事文ではなく説明文である。その内容は遊女評判記的な記事である。六巻を中心とする諸章にそのような遊女評判記的な文が断片的に散在していること、更にその遊女評判記的な記事の発端とも言うべき記事が六ノ二「身は火にくばるとも」にあることに気付いた。そのことから、これらを「一代男」の編集以前に成立していた転合書の種類であろうと推定した。それらをもとに私の第一の仮説が出来たわけである。またそのような転合書の断片の一種を含む六ノ四「寝床の菜好」は、文体・内容の整わぬ数種の断片の総合から成立していることをも合わせ考えた上で、私の第一の仮説が出来たわけである。即ち、この作品のナレーターは既成の転合書から複数の小断片を抽出編集し、それらを一章の根幹とし、それらに適宜改稿を加えたり増補を行なったりなどして現在の各章を成立せしめたのであらうと私は考えた。私は自分の仮説を他の諸説に対して編集説と命名した。その際、私の意図したところは「一代男」の創作方法は何かについての論を仮説することにある。誰が編集者か、

はその段階での問題ではなかった。それはその後に残るはずの問題点であった。それを改めて考える際には西吟中心の編集という点も跋文から考えられないわけではなく、そのことは十分に留意すべきであるという見地から西吟の編集ということも考えられると述べたが、私の意図は編集者を特定することにあつたわけではない。私の表現の至らなから、そのことについての誤解が若干あるかに思われるので附記する次第である。

私の第二の仮説はこうである。巻五と巻六とに年立の重複する箇所が六章分ある。これは六年分に相当する。一ノ一の章末で五十四歳までに関係を持った女性や少人の数を挙げる箇所があるが、これは素案段階では五十四歳で世之介が女護島に出发する予定であつたことを示すものであり、のち編集上のある種の段階で素案を修正して六章・六年分の増補を加えた結果現行作品では世之介は六十歳で女護島に出发することになったのであらう。そのことのように、現作品には素案に基づいて編集された章もあり、修正案に基づいて編集された章もある。巻五の六章が最も大きい修正であり、一ノ七「別れは当座はらい」や四ノ二「形見の水筒」などは中修正であり、小修正は七ノ一の「其面影は雪むかし」の見出しを始め数多く見られる。これが私の第二仮説である。修正案というものには再修正案、再々修正案

の存在も考えなければならぬし、素案もそれが其の第一案であつたかも知れぬ。それが実は修正案であつたかも知れない。三都遊里物や地方遊里物が章群を構成しているが、あるいはこれがこの作品の最も原初的な成立段階をとどめるものであるかも知れない。それらのことも考慮せねばならない。したがって素案というものも現作品の形態の初期段階という程の意であると考へてもよい。そのように、素案・修正案の実態については考慮すべき点は多々ある。

そのように、第二仮説はこの作品の全体の成立経緯を巨視的に把握することによつて出来たものである。それに対し、第一仮説は各章の成立経緯を考慮するもので、比較的には徹視的な解釈であると言へるであろう。それらに対し、第三の仮説は数章単位で編纂されたであろうと推定するもので、両仮説の中間的単位に関するものであると言ふことが出来るであろう。この作品では蓮葉女の記事が二度出る。一つは三ノ三「是非もらひ着物」で、一つは三ノ六「木綿布子もかりの世」である。中に第二章隔てたに過ぎないのに、同じ素材について反復するのは異常である。もしこの作品が従来言われたように書きおろしであり、それも一日二章ほどのスピードで書きおろされたものであるなら、このようなことは起りえなかつたであろう。しかし、

実は三ノ三と三ノ六とは接近する箇所位置するけれども、人称を中心に考えれば、これらは別箇の章群に所属し、異なる時期に編纂されたことになる。またそれらの編纂には若干の時日を要したであろうと考えることにするなら、このような不備の理由は水解するであろう。このように素材の重複するものは五ノ六「当流の男を見しらぬ」と八ノ四「都のすがた人形」とにおける人形にも見られる。これも同様に考えることができよう。

### その三 三都遊里の遊女の個人的表現について

「好色一代男」についての拙論の特異点は、以上のような成立経緯論にもあるが、今一つは世之介をこの作品の主人公と見ない点にある。この点においては全ての学説に對立すると言へる。ほとんど全ての学説は世之介をこの作品の主人公と考へ、世之介論が即「一代男」論であるという傾向を持っているからである。既述したように「一代男」の各章を独立した文章と考へ、それらの分析を行なつた結果、「一代男」の文章の主たる傾向は一代男型の文章であり、まゝ一代女型文章その他を含むと結論した。一代男型文章も一代女型文章もともに本文部は一部構成法取るが、両者はその内容が正反対になるものである。一代男型文章の本文は謡曲の構成法に類似し、謡曲との対比で



説明することができる。ある種の謡曲では、ワキに「諸国一見の僧」があり、その僧が諸国行脚の末某地に到着し、後ジテの化身である前ジテに邂逅する。そのことがほぼそのまま「二代男」に該当できる。「諸国一見の僧」に該当する世之介が旅に出て、その結果某所に赴き、そこで後ジテになる女性に邂逅する。それは謡曲でも「二代男」でも同様である。後半に、謡曲では後ジテ中心の劇的展開が見られるが、「二代男」では後ジテになる女性を中心にして劇的展開がなされたりその職種の解説がなされたりする。そのような構成法を取る文章では後ジテになる女性などが真の主人公であり、世之介はワキであることは言うまでもないであろう。世之介を誕生から老後の舟出までの年齢的成長に仕組んだのは、この作品に長編的統一を与えるための趣向にすぎない。後ジテとして多くの職種・身分の女性たちが登場するが、それが合理的に登場しやすいように前半の世之介について適宜の情況設定をする。世之介はあくまでも方便的設定にすぎないので、主人公の女性たちの性質に合わせて適宜に情況設定をする。それで世之介の人間設定がメチャメチャになる。たとえば、四ノ七で二万五千貫目の遺産相続して大分限者になったはずの世之介が六ノ一・六ノ三などでは落ちぶれ果てた男として登場する。そのような矛盾・不備は数限りない。それ

らから、すでに三十年ほど以前に野間光辰氏は「定本西鶴全集」の「二代男」の解説で、「本書は主人公世之介の生涯を主題とした長編小説でもない。世之介は世之介という個体的存在ではない」と述べられた。そのことは、この作品の文章論的分析からする結論からも裏付けられるわけである。ただ野間氏と私の違いは、野間氏がその解釈に立ちながらも十分世之介を切り捨てきれなかったかと思われるのに対し、私が世之介主人公から世之介ワキ役論にまで転換した点にある。私は、ただ、野間氏が言われるはずのことを言っただと思っている。三十年前に、野間氏が今少し論旨を展開されたら、当然私が三十年後にやっとたどりついた結論を早くも述べられたはずであろうのに、と今思うのである。

世之介がワキ役にすぎないとすると、この作品に主人公はいないのかと言うに、それはいると思う。各章の本文の後半に後ジテとして登場する、女性を中心とする者たちである。それは三都遊里の遊女であり、地方遊里そのものであり、半玄人女たちであり、地女たちであり、時には男娼である。それらを一貫するものは、女性を中心とする好色生活の種々相ということである。これが西鶴の意図した主題であつたらう。それは、「好色一代男」はいうまでもなく、「好色二代男」「好色五人女」「好色一代

女」などの好色物に一貫した主題であつたらう。西鶴は好色物で一貫して女性を主たる対象として創作した。ちようど谷崎潤一郎が女性のみを対象とした作家であると言われているように、ある時期の西鶴はそうであつた。これが私の一つの西鶴観でもある。

「一代男」を世之介中心に把握しようとする者に取つて障害となるはずの章に四ノ三「昼のつり狐」がある。これは世之介の好色修業などとはなんの關係もない章である。本文にかすかに世之介が夢山の供をして舞子遊びのために京に上つたらしいけはいがあるだけである。世之介は単に形式的に名を挙げられたまでという感じである。この章では世之介は雲散し霧消する。世之介は霧に隠れてしまふ。変身さえもできないのである。本文後半は、上層町人の妻女たちの浮気遊びの四十八手を述べたもので、全く女性中心の章である。この章は、「一代男」が各種女性の好色生活の種々相を対象とした作品であり、世之介は方便的人物に過ぎないという拙論の趣旨を最もよく裏付けるものであると考えられる。

この作品が女性を対象とするものであつたと言つても、全ての女性に対し同等の処遇を示しているかと言つて、そうでもない。たとえば三都遊里の遊女に対するものと地方遊里の遊女に

対するものとは、同じ遊女でも、処遇を異にする。そのことは遊女個人の固有名詞の用法によつても知られる。三都遊里物では当該章において対象とする遊女が本文中にその固有名詞によつて示され、それは同時に巻首の目録の年立の下の副題でも示される。そのことによつて、編者が当該章では当該遊女個人を意図的に対象としたのであるということが分かる。ところが地方遊里物ではまず本文中に固有名詞の現われることはほとんどないし、たまたま本文中に固有名詞の使われることがあつてもそれが副題に示されることは全くない。そのことは、この諸章の編者の意図のあり方を示すものと思われる。まず三都遊里物について例を挙げれば、次の如くである。

三都遊里物と通称されるのは六ノ一および六ノ二、八ノ三の各巻であり、このうちには七ノ二や八ノ一のように末社遊び中心の記事があり、それらには遊女は関与しないので本文中に遊女名は挙げられず、当然副題にも遊女名は挙げられない。また七ノ三「人のしらぬわたくし銀」は新町の特定の遊女のおもしろからぬ行為についてのすつば抜きである。それで遊女名を、本文中にも副題にも挙げない。それらを除けば、三都遊里物の諸章では本文中に遊女名があり、副題の中にその名が挙げられる。本文中に遊女名を挙げることは、それによつてその章における

対象を明示するものであり、同時に固有名詞の存在によってそれが実在の遊女の行実についての記述であるとの印象を強く与えるものである。また副題中の遊女名の存在は、その遊女が編者の意図する当該章における対象であることを示すのでもある。本文中の遊女名は対象となる遊女の固有名詞のみに限りその他の遊女名は挙げないことが表現効率上好ましいし、ほとんど全ての章においてそのように配慮されている。例外に六ノ三「心中箱」がある。本章は藤浪を対象する章であり、藤波について「藤なみ」「藤さま」「なみさま」などと表現される。そのほか世之介の家で太鼓持の長七に心中箱などを見せるくだりに、なお御次の間をみれば、らく書らくの緋むく。血しほりのしろむく。後の朝の名残を。そめくと。書つ、けたる着物。十六形の地紫。あれは。花崎さまの念記。紋つきの。三味線。きやふを。上下。帯を中へりにして。姿絵の懸物。其かぎりなく。

「花崎さま」の語が右に見える。これは本来花崎に関する転合書中の一段であり、それを藤浪に転用することにしたものなので花崎の名が残ったのかも知れない。そのためにこのようなことが生じたものであるかも知れない。とにかく、藤浪に関する記述の中に花崎の名の見えるのは、効率上おもしろくない。し

かしこれは例外的な現象ではある。

副題には若干の型がある。

(1) 遊女名＋主題＋事

五ノ一―よし野はこんばんの事

六ノ四―御舟がまねのならぬ事

六ノ七―野秋両夫に目見ゆる事

七ノ二―今のかほる鬻東好の事

七ノ七―今の高はしがみだれかみの事

以下の群では遊女名の前に地名を挙げるが、この類にはそのことがない。一つには音数との関係があるかも知れない。もつとも七ノ二は本文に「昔しの人のかほる」とあるのに対するものとして「今の」が添えられることになったのであろうし、七ノ七は七ノ一に「右の高橋」とあり、「右の」が「古の」の誤記によるものであるべく、それに対比して「今の高橋」と称せざるを得なかったのであろうし、そうとれば地名の「鳥原」は七ノ一に既出なので省略されやすかったのであろう。地名の無いことに関しては、そのようなものが編集の古いものを表わすかとの考えもできるが、そのことについては目下の所十分考えていない。主題とは当該章において当該遊女の記述の主題となる事項をさす。これに関する表現を持たぬ章もある。なお、

六ノ四や七ノ七に見られるように、固有名詞のあとの連体助詞は「が」を用いて「の」を用いない。この接続助詞については、室町時代までは厳しい使い分けのあったことは国語史上でよく知られている。即ち、「の」は尊敬に用い、「が」は軽侮謙遜に用いられた。もっともこれらの用法には軽侮の気持は認められないように思われる。

(2)地名十遊女名十事

六ノ一―しまばらむかし三笠が事

七ノ一―島原右の高橋事

七ノ五―新町木の村屋和州事

七ノ六―同ふちやあづま事

八ノ二―江戸小むらさき事

八ノ三―島原よし崎事

地名の点では、八ノ二が異例である。というのは、他の二例は「江戸吉原」と表現されるのに、これでは「江戸」とのみ表現されるからである。遊女名の点では新町の二例がともに「木の村屋和州」「ふちやあづま」と抱え主の名を添えている点が目立つ。編者にはそれが聞きなれ旨いなれた表現であったためかも知れない。また固有名詞と「事」との連接法で六ノ一を除くほかは、ことごとく連体助詞を省略してある。このような形

式上の一致不一致が各章の内容や修辭法などどう関連するか、ひいては「一代男」の編集経緯にどう関連するかということは今後の問題と考えている。ただ作品の構想の点から言えば、一般に「一代男」は世之介の一代記として一構想の下に把握するのに対し、私は卷四末までと卷五以後とは別の構想のもとにまとめられていると解釈する。卷四末までの前編は卷四末の遺産相続でめでたしめでたしと終止符を打つ。これに對し卷五以後の後編では、五ノ二―五ノ七の増補分を除く素案の構想では、貧しい男または零落した男と遊女、不粹な男と遊女との組合せから次第に上昇して裕福な男と遊女との組合せにうつるといふようになる。前編と後編との構想は別物という解釈を持つ。その解釈による後編の構想の中では、六ノ一などの致章は世之介の零落時の章や不粹時の章であり、他は全て世之介の裕福時の章である。このことは後編の成立経緯にも関連することである。即ち、吉江久弥氏は「一代男」全体の中で三都遊里物が最も早く著手されたのであろうとの成立感を持たれる。私もこれらがこの作品についての最も早期の形態をとどめるものと考えているが、私と吉江氏との違いは、吉江氏が三都遊里物が一度に、おそらく順次に創作されたとされるかと思われるのに対し、私はその三都遊里物も地方遊里物も数次に分けて編纂されたかも

知れないと考える点にある。裕福な粹な男の遊びを主とするのが早期の構想であり、貧しい男や零落した男や不粹な男と遊女とのからみというものが遙かにすすんだ段階の構想である。後編もそのように構想のたて方に変遷があったのであろう、それが副題に反映したのであろう、という解釈もできるかと考える。遊女評判記の小説的形象化という点では、裕福な男たちと遊女との組合せが遊女評判記の実状からは最も容易に着想されるものであり、貧しい男や零落した男と遊女との組合せはそれには遠い世界であることは言うまでもないであろう。遊女評判記は六ノ二「身は火にくばるとも」の冒頭部からも導かれるように裕福な、遊女遊びに練達の人たちの合評という体裁が着想され易い形であり、それに近い形態が小説的形象化の際には最も容易に着想されるものであるといえよう。そのような解釈から後編の中では巻七の諸章や巻八の三章が早期の編纂によるものと考えられるが、その副題が以上の形式を持つことは興味深い。

(3)地名十遊女名十主題十事

六ノ二―新町夕ぎりが情の事

六ノ三―しまばらぶちなみ執心の事

六ノ五―島原初音が正月羽織の事

六ノ二は遊びに不鍛練な男と遊女との話であり、六ノ五はや

や練達な男と遊女との話であり、六ノ三は零落した男と遊女との話である。同じく零落したとはいっても、六ノ一は家邸もあとかたないほど零落した男と遊女との愛情が素材となり、六ノ三は奉公人もちりちりになったほど零落したが、まだ家邸は残っているほどの男と遊女との愛情が素材となるものである。六ノ一よりは六ノ三の男の情況がまだましという順であり、六ノ五は裕福な男であるが遊女遊びでは十分には練達とは言えない男がワキ役を勤める。それを「世之介日來は。名拳の上手なれども。又初音が座配。世間の格をはなれ。外の太夫の。手のとどく事にもあらず。」と表現し、その結果章末では男は遊女に賦とばされる。「跡口舌して。起さはぎて。踏れける。何か申て。気に違ひける。しらずかし。」とある。六ノ五の段階では世之介はまだ十分には粹と言えない。逆に言えば、十分には粹と言えない男との応接を素材に六ノ五は構想されたと言える。そのような巻七・八が裕福な粹な男と遊女との応接を素材とした章であるとすれば、五ノ一や巻六の大部分は貧しい男、零落した男、不粹もしくは生粹の男たちと遊女たちとの応接を素材とした章であると言うことができる。そしてそれらの諸章の副題が共通の型を持つということが出来る。

(4)地名十地名十遊女名十主題十事

#### 地名十地名十遊女名十事

六ノ六一江戸吉原よし田が利発の事

七ノ四一江戸よし原高雄紫が事

この二章は型の点では例外的な章である。ただこの地名の重複は「全体地名十部分地名」よりなり、自然な方法と言えり。

その地名の重複の点を除けば、六ノ六は(3)の型となり、七ノ四は(2)の型となる。この二章は、成立その他を考慮する場合には、(3)または(2)に還元させることができる。

以上のように分析を加えてみると、副題の型というようなのが単に形式上の問題というにとどまらず、「一代男」の成立をときあかす鍵につながることも考えられるわけである。そしてそれはまた成立論の如何に関する解釈にとどまらずひいては「一代男」の文学性をきわめる上での一つの契機をなすとも言えるかも知れない。今私はそれを編集段階のメモかと考えている。

#### その四 地方遊里の遊女などの個人的表現について

三都遊里物では遊女の個人々が対象となつた。その表われとして、本文中に現われる遊女名は副題に示され、その遊女を当該章の対象とするのが編者の本来の意図であつたことを示してい

る。地方遊里物は違ふ。地方遊里物では当該章の素材となつた遊女についてその固有名詞を本文中に挙げることは本来ほとんど無いが、まれに本文中に固有名詞を挙げるがあつても、副題にその遊女名が現れることは全くない。それは本来地方遊里全体の紹介が目的であつて、個々の遊女の評判は目的ではないからである。個々の遊女はその地方遊里の言わば象徴であり、その地方遊里の特性を紹介する契機をなすに過ぎない。その点に、「二代男」の地方遊里物と「二代男」の地方遊里物との差違が認められる。地方遊里物では二ノ四「替紙のうるし判」と三ノ五「集札は五刃の外」とに遊女の個人名が現われるが、それはこれらについて描写の客観性を強めるために使用されたに過ぎず、編者はそれにそれ以上のことを予定してないので副題にその個人名を記入しなかつたのであると思われる。つまり、この両章の固有名詞は固有名詞の修辭的技法として使用したものに過ぎないと考えられるのである。その両章の表現は次の如くである。

二ノ四―其後近江といへる女。是から見れば。たしか大阪にて。玉の井と申せしが水の流れも。爰にすむ事笑しく。其夜は客なき事を。さいはい。口鼻に約束させて。更行迄さしわたし。かしらから。物毎しらけて。かたりぬ。

三ノ五―いやながら。外に。何もなければ。其中でも見よき  
がとく也。よしあしのへだてもなく。五匆宛に定め置こそ。  
正直なれ。小金といふ約束して揚屋といふ事もなく。親方  
七良太夫が内に。新しき薄縁敷し。

二ノ四も三ノ五もともにその前章の諸章は世之介の名を挙げ  
る諸章である。そのような諸章の中に、これらの地方遊里物が  
挿入されたが、その編纂の際前後の諸章との関係から、その遊  
女にも固有名詞を与えることになったのであらうと思われる。

三ノ五では遊女の抱え主についても「親方七郎太夫」と個人名  
を挙げるし、これにつづく三ノ六では勸進比丘尼にも固有名詞  
を用いる。

三ノ六―勸進比丘尼声を揃て。うたひ来れり。(略)あれは正  
しく江戸減多町にてしのびちぎりをこめし。清林がつれし。  
米かみ。其時は菅笠がありくやうに見しが。はやくも。其  
身になりぬと。むかしを語る。

また一ノ五「尋てきく程ちきり」で遊女の親の名に「山科の  
里にて源八」とあるのもそれらに近い。

世之介についてその固有名詞を表現することが強く意識され  
た結果、その前後の諸章においても、世之介以外の人物につい  
てその客観性の表明の一法として固有名詞が用いられることに

なつたと考えたのである。三都遊里の遊女以外については、  
その個人名の表現が偶発的であると考えられる。なお、地方遊  
里物に共通する点は世之介に必ず同伴者のある点で、それらで  
は巻五の諸章で個人名を挙げ一ノ五でも同様にするが、二ノ四  
・三ノ五には個人名を挙げない。この件は今省略する。

#### その五 女性の集団的表現について

修辭的技法の中で多用されることの多いものにトリオ型があ  
る。これは同一もしくは類似の語句を三回連続させるものであ  
る。これに二種ある。一つは同一語句を三回反復させるもので、  
最も衆知の例では淀川長次氏の「さよなら、さよなら、さよな  
ら」がある。二回反復はリズムカルではあるが、強調度が弱い。  
それに比して三回反復は強調度が強い。四回はしつこすぎる。  
もっとも淀川氏には強調調という気はないそうである。あちらの  
お客様にもさよならを言いこちらのお客様にもさよならを言う  
との意図で三回繰返すそうである。それで三回とも同じ調子で反  
復するのであらう。もし強調調ということを用意するなら、三回  
目を強く言う。それを最も効果的に使った例として、私は杉村  
春子の「女の一生」の終幕に近い場面を想起する。和解のため  
に久しぶりに訪れた夫が掃り際にそのまま倒れてしまう。それ

を転んだと考えた妻は「あなた、あなた」と軽く呼びかける。夫が死んだとわかった妻は三度目に悲鳴に近い声で「あなた」と呼び掛ける。妻の心理を最も端的に表現しえた一例である。それに近いことは多用される。森昌子の「先生、先生、それは先生」や山本リンダの「ウララ、ウララ、ウラウララ」など数えきれないほどある。もっとも、四回はしつこいと述べたが、それを承知で四回以上反復するのも近來の技法の一つである。デイスコの例で言えば、ドナ・サマーの「ミミの歌」で数えきれないほど「トライ・ミー」を反復するなどがそれである。

このように同一語句を反復する方法に対し、類句の語句を三回並立させる方法がある。同一語句の反復よりも効果は複雑である。これには、宝塚歌劇団の「滑く、正しく、美しく」やオリビックのモットー「より早く、より高く、より強く」や、感動的な映画「名もなく、貧しく、美しく」や、格言「天知る、地知る、汝知る」等がある。「草枕」の冒頭もその一例と出来よう。

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。

これは智情意を含む文がトリオになった例である。このようないトリオ型表現として固有名詞を三つ並べる表現が「一代男」に

多い。それも後編より前編に多い。そのことと、後編より前編の方が後の編纂と考えられることは関係づけて考えられる。

これは特に「一代男」に多いと言うべきかも知れない。「一代男」では特に多用されるが、以後の作品では少なくなる。ちょうど漱石の作品で、初期の作品にはトリオ型・尻取り文・同一述語反復法などが多用されるが、主題の重さに重点が移行するようになるにつれてそれらの技法が次第に薄れていったようなものである。そのように、西鶴の作品では、「一代男」は修辭的技法に特に苦心した作品であると言うことができるかと思う。遊女などの名をトリオ型表現にしたものとして次の例を挙げることが出来る。

一ノ一 其比名高き中にも。かづらき。かほる。三夕。思ひ  
く／＼に身詣して。嗟峨に引込或いは。東山の片陰。又は藤  
の森。ひそかにすみなして。契りかさなりて。此うちの腹  
より。むまれて世之介ト名によぶ。

右の文中で、「かづらき・かほる・三夕」と並記した点は、固有名詞のトリオ的表現と言えるが、同時に「嗟峨に引込」「東山の片陰」「藤の森」も不完全ながらトリオ型と言うことができる。このような固有名詞以外のトリオ型も多く拾うことができる。同じ一ノ一では「名古屋や三左。加賀の八などと。七ツ



紋のひしにくみして」における三・八・七や「或時は若衆出立、姿をかえて。墨染の長袖。又はたて髪かつら」の「若衆出立、

墨染の長袖、たて髪かつら」もその例とできようし、「よろづに、つけて。此事をのみ忘れず。ふどしも。人を頼まず。帯も。手つから。前にむすびて。うしろに。まはし」もこの例とするところができるかも知れない。このトリオ型表現が一ノ一の美文調の一手法をなしていると言うことができるであろう。類例は多い。二ノ四「晋紙のうるし判」における「志賀。千とせ。きさ」や、三ノ二「袖の海の肴売」における「花鳥八島花川」や、五ノ二「ねがひの搔餅」の「兵作小太夫虎之介」などとその例が多い。そのほか男娼では、

二ノ一—あるじそれ／＼の名をふれける。思日川染之介様。

花沢浪之丞様。袖島三太郎様。いづれもおもしろ。笑しきさま。

その他地名では二ノ一「恋のすて銀」における「交野牧方。葛葉」の例もある。この種の例を探せば、いろんな型がある。

これを西鶴の修辭法の重要な型として挙げる事ができるのであろう。固有名詞に関するものとしては、これらのうちにも更に仔細に検討すべきものがあるうし、これらのほかにも型をなすものがあるうが、今は以上にとどめることにする。

## (二) 類型的表現

「好色一代男」が形式上多くの類型を持つことはよく知られている。即ち、全巻の巻首に目録があり、それには年立があり、その下に二行にわたって各章の本題と副題とが並記され、本題は各章の見出しとして使用される。各章では本文が二丁半あり、そのあとに挿絵が半丁あり、それには世之介相当人物が画かれる。もちろん、本文中には毎章世之介または世之介的人物が現われる。「一代男」にはこのような形式的な面に限らず各種の類型が見られる。そもそも、類型という点に關して言えば、それは「一代男」に始まることではない。西鶴の独壇場とも言うべき矢数俳諧にもすでにそれが見られる。西鶴が生玉神社の社頭で一大聴衆や多くの立合衆を前にして一昼夜に二万三千五百句の速吟を行ない、それによって二万翁などと自稱したことは衆知のことである。それは、飲食排泄などの生理的現象のための所要時間を無視しても、四秒足らずに一句の割合による速吟である。その速吟が可能であるのは、単に言われるような不羈奔放な連想力だけで不十分であって、むしろその不羈奔放な連想力を援護する何かが必要であると思う。その何かが類型的連句法

であると私は考える。「大句数」の中に、火事に対して車長持を付け、更に嫁入を付けるといふ付句の型が二回出る。それらは連句の基本としては同じ型であるが、二度目は一度目のものと若干の辞句をさし替えてある。そのような類型的連句の型を西鶴は多数用意し、主としてそれらを巧妙に使用することでその連吟を成就したのであらうと考えられる。また「一代男」の各章を独立した文章であると看做すことにすると、全巻の文章は若干の類型よりなることが知られる。「一代男」に限らず西鶴の作品はほとんどが短編の集合よりなると言えるが、それらの各章も究極的には若干の類型になつてしまふように思われる。「一代男」の文章の中で対照的に著しいものは「一代男型」の文章と「二代女型」の文章とである。ことに両者はともに本文部が前後の二部に分かれ、それに顔縁部としての章首と章末とを加えれば、四部構成になると解される。ただ、その本文部の機能が、「一代男型」と「一代女型」とでは相反するものになる。そのような文章構成法ほどに頼用されるわけではないが、使用されるとなると必ず一定の類型を取るものに女性描写の類型がある。「一代男」の中では最も緻密な描写を行なうものに三ノ五「集礼は五夕の外」における寺泊りの遊里の遊女描写が挙げられる。

おりふし八月十一日の。夕風。はや此所は裕をきるぞかし島をよきとおもへばこそ。いつれも。袖の品をかへ。金入の襟をかけぬといふ事なし。帯は今織の短きを。無理にうしろにむすび。二布は越後晒赤染にして。其ま、美しき白にも。是非におしろひを。塗くり。額は。只丸く。きは墨こく。髪はぐるまけに高く。前髪すくなくわけて。水引にて結添。赤ひはな緒の雪駄をはき。懐のうちより。手をさし入裙を引あげ。ちよこくとありくなりふり。

寺泊りの遊女一般を右のように描写してその田舎らしさを述べる。襟・帯・二布・白粉・きわ墨・ぐるまけ・水引・裙などのそれぞれが都会人の目で見て流行遅れであることを逐一述べる。その限りで個性的表現と言えるが、それらの各部を述べる順序が類型的である。それは、(甲)全身的部分(着物・襟・帯・二布など)、(乙)頭部(白・白粉・きわ墨・髪など)、(丙)脚部(雪駄、裙など)の三部に分けられるが、これらの描写順位は常にこの順位であり、必要あつて、たとえば羽織の描写を加えるときには(甲)の描写の中で、着物のあとに加えられる。また逆に何かを省略する時も、全体としてはこの順序をくずさない。頭部の描写についても、容貌上の描写を行なうことはほとんどない。容貌上のことにはほとんど関心を持たなかつたやうで、ことに着物

・帯などの描写によつて対象となる女性の個性的描写を行なつた。それらの限りでは西鶴は対象の個性的描写を行なつたと言へるが、それらの細部を述べる手順は典型的的であると言ふべきである。既に、西鶴は対象の個性的描写法を開拓したと言へるし、それが常に一定の順序で描写されるという点からすれば、それは典型的的であると言へる。つまりそれは西鶴独自の個性的な型による典型的表現である。そこに西鶴の独自性と限界性を見ることが出来る。

類例に四ノ六「目に三月」における御所女の描写が挙げられる。

下には。水鹿子。の白むく。むらさきしぼりに。青海浪。紋所は。銀にて。ほの字。切ぬかせ。五所のひかり。帯は。むらさきのつれ左巻。結びめ。後に。粹目のすみに。鉛の。しづを入。髪は。水引懸て。黒緇子のきどく頭巾。まづは。首すちの白き事。木地のつゝら笠に。しろき紐を。上にむすはず。足袋は白緇子に紅を付。ばたん懸にして。ばら緒の。藁草履はきつれて。二十四五人。

これには細部的描写の増減が見られるが、描写順位はほぼ同じい。二布とか下着などの外部からはよく見えなはずの描写まで行なっているが、これは対象の個性的描写のために行なつた

ものであろう。これらの典型的順位に従うもののほかに、特異な描写にはその特異点などにおいて描写の順位をかえ若干の例外的描写を行なうこともある。一ノ六「煩惱の垢かき」における風呂屋物の描写にそれが見られる。

風義は。ひとつきる物。つまたかに。白帯こゝろま、引しめ。右で「つま」が帯の前に描写されるが、これは描写順位をくずしたものと見える。四ノ五「昼のつり狐」における舞子の描写にも細部の順位に若干相違する点が見られるが、大筋の順序は変わらないと言える。

まれに容姿の描写をも行なうものがある。簡単な例では、一ノ六に「口びるそつて中高なる貞にて。秀句よくいへる女あり」の例が挙げられる。精しい描写の例では三ノ一「恋のすて銀」の文が挙げられる。

京はきよく。少女の時より。うるはしきを。貞はゆげに。むして。手に指かねを。さ、せ。足には。革踏はかせながら。寐させて。髪はさわかづらの帯に。すきなし。身はあらひ粉絶さず。二度の喰物。女のしつけ方を教え。はたに木綿物を着せず是に。したつるぞかし。おのつからの。女にはあらず。これに。そなはりし女は希也。当世女は。丸顔桜色。万事目ずきにと。

この描写は、「二代女」の「国主艶妾」にやや改稿の上再使用される。

女性描写で留意されることは、巻六を中心に散在する遊女品定め文に独自の描写を持つ点である。まず六ノ二「身は火にくばるとも」の本文前部に、数人の粹人が集まって遊女の合評を始めるところがある。これは歌舞伎評判記に多く採用されることになる手法である。そのあと逐次評判がされるが、その評判の内容に当たるものが巻六を中心に各章に散在する。まずその評判の内容を挙げれば次の如くである。

入日も背山にかたふき。名残おしきに。今すこし年前。小作り成こそおもひど。顔うつくしく。け高く。心立もかしこし。大橋は。せい高くうるはしく。目つきすゝやかに。口つき賤しく。道中思はしからず。座につきての有様。歌よまぬ小町に等しく。心さしよはくとして。諸事。禿のしゆんが。智恵をかすぞかし。お琴は。ふつ、か成貌。いやらしき所。それをすく人も有。万かしこ過て。欲ふかく。首すちの出来物。ひとつの歎也。一座のさばき。終に怪我を見付ず。どこやらに。よき風義そなはりぬ。朝妻は。立のびて腰つきに。人のおもひつく所も有。脇顔うつくしく。鼻すちも指通つて。気毒は其穴。くろき事煤はきの。手伝かと。おもはる。され共

花車かつて。おとなしく。すこしすんに。みゆる時もあり。いつれか太夫にして。いやとはいはじ。

右では「背山・大橋・お琴・朝妻」の順に遊女評判がされている。「背山」については、背恰好・顔・氣立の順に評判を加えるが、大橋については更に道中・座配が加わる。六ノ四「寢覚の業好」では御舟についての評判がされるが、それは更に精細に具体的に評判される。

起別る、風情も。しとやかに。さ、もよき程に飲なし。よびましやといふ声も。更に聞いれず。客こ、ろを。のこさぬ迄ありて。内義女房共にも。うれしがる程の。暇請。塗下駄のをと静に。さしかけから笠もれて。ふる雪袖をいとはず。大やう成。道中何とて京にては。太夫にはせなんだぞ。尤うつくしかず。たはけとも。太夫は。それによるものかと。

これでは座配・道中の様子が精細に評判されている。その終りにある会話に、「何とて京にては。太夫にはせなんだぞ」「尤うつくしからず」「たはけとも。太夫は。それによるものか」とあるのは、合評の際の応接の形態が残ったものと考えられる。このように座配・道中について評判するのは遊女評判記の常であり、遊女の評判なればこそそれが必要条件であったことが思われる。

これが、私の推定では、西鶴が「一代男」編集以前に書きあげてあった遊女評判記的な転合書の一部であると考えられる。當時遊女評判記は数多く生産された。西鶴もそれに示唆され、自分でも書いてみたのであろう。それが六ノ二などに使用されることになったのであろう。六ノ二などに見られる残骸の断片から判断するに、部分的にはセンスのいい表現も見られはするが、全体的にはさほどすぐれた出来映えとも思われない。世間をあとと言わせるほどの出色の作品とも思われない。そのことは自覚されていたであろう。それで、種々摸索された末案出されたのが、遊女評判記の小説的形象化ということであつたらう。こうして三都遊里物の編集が始まったのであろう。これが「一代男」の原初的形態であつたらうというのが、私の「一代男」編集の開始部についての推定である。「一代男」の成立について前奏曲的部分である。

ついでに言えば、六ノ四「寢覚の業好」には、また世之介が遊女にその心得を語る箇所にも、五年余りの見聞を書きとめたもののあることを述べる箇所がある。

此外見とがめて。五とせあまりの事共其かぎりしらず。名を書事もむごし。只影を嗜み給へと。人のいふ事よく。合点する。女郎にうなづかせて行に。

これも、「一代男」編集以前に書きあげてあった転合書の存在を示唆するものなのであろう。それが「一代男」の中で遊女の裏話を書いた「寢覚の業好」や七ノ三「人のしらぬわたくし銀」の原形となるものであるかも知れない。三都遊里物では、京の島原や江戸の吉原の遊女は替めあげるが、新町の遊女については裏話やすっぱ抜きや非難に終るようである。それは西鶴が大坂の住人であり、新町については知見が多かつたからのことであらう。

ところで、三都遊里の遊女についての女性描写とその他の女性性についての女性描写の相違はどのように考えるべきかということである。一つには、三都遊里の遊女のような特殊の職種的女性はその職種に應じて座配・道中などの評価基準が設定され、その評判がされたのであり、それは職種の特異性に基づくものであるとの解釈が出来る。また一つには、その部分が「一代男」編集以前に成立していた転合書の転載によるものと思われることからすれば、それが初期の女性描写の形態をとどめるものであるとの推定もできる。その推定には、既述のように巻七・八(一―三)は後編中では早期の編集であらうと思われ、巻六などは遅い時期の編集であらうと思われるとの推定を援用すれば一層都合であらう。そのような考え方を導入すれば、三都遊里

の遊女についての女性描写は西鶴の考案した初期の女性描写の形をとどめるものであり、それ以外の女性についての女性描写は地方遊里物の編纂以後、あるいは「一代男」の前編の編纂の頃始められた手法であり、これの編纂時代における改稿の際はこれに統一されることになったものと解釈することができる。なお、「一代男」の女性描写の型はほぼそのまま「一代女」にも現われる。「一代女」は厳密には私の言う伝西鶴作品であつて、それが果して西鶴の作品あるかどうかは今後検討すべき大きな課題であるが、その検討に当つては、この女性描写における相互関係も当然考慮されるべきである。

女性描写に関連して今一つ述べるべきことがある。それは必ずしも女性描写に限ることではなく各種の描写一般には妥当することである。女性描写の中でも精細な描写に見られるように、ある意味では精細をきわめるとも言うべき描写が数かず見られる。しかし、具体的な細部的描写については精緻の限りを尽すが、総括的な表現はこれを欠く。たとえば、その容姿について言えば、などの総括的な言辞を欠いていきなり細部的表現に移る。たとえば、一ノ七「別れは当座はらひ」では世之介は小者あがりの若い者と清水八坂の辺を探訪し、茶屋にあがる。室内の描写、お定まりの汲肴の描写、出てきた茶屋女の描写が連続

するが、それらでは皆細部的描写に始まり、終り、次の描写に移るといふ手法になる。

奥に入れば、梅に鶯の屏風。床には誰が引捨し。かしの木のさほに。一筋切れて。むすぶともなく。うるみ朱の。煙草盆に。炭団の埋火絶ず。盃はなにとなく。うちしめりて。心地よからず。おもひながら。れいのとさん出て。祇園細工の。あしつきに。杉板につけて。焼たると。お定りの蛸。漬梅色付の甃に。塗竹箸を。取そえ。おりふし春ふかく。藤色のりきん島に。わけしりだてなる。茶じゆすの幅広。はさみ結びにして。朝鮮さやの二の物を。ほのかに。のべ紙に。数歯枝をみせ懸。髪は四つ折に。しどけなくつかねて。左の御手に。朱盞のつる引提。たち出るより。

これらの手法は西鶴の描写法の性格をよく示している。もつとも稀には七ノ一「其面影は雪むかし」における高橋の描写における如く、「高橋其日の鬢東は」と書き始めるものもあるが、それは稀な例に属する。私の考えでは、西鶴は具体的描写においては鋭く精緻をきわめるところが見られるが、抽象的な表現においては欠けるところがあり、本来それが不得意であつたと思われる。そのことはいろんな点に見られるが、女性描写などにそれが明瞭にうかがわれるのである。なお、女性描写については

本学卒業生魚本直代・藤井晴江両君の卒業報告がある。それから裨益を受けた。附記して深く謝意を表わしたい。

### (三) 問答型説明文

問答型説明文とは私の造語である。その形式は会話文による問答の形態を取っているが、実質的には説明文の一種である類の文章という意味で問答型説明文と言う。文章にどのような種類を認めるかについては成案を持たないが、西鶴の文章については少なくとも叙事文と説明文との二種が認められる。叙事文は文の種類としての動詞文を中心とするものであり、説明文は本来文の種類としての形容詞文を中心とすると考えられるが、形容詞文のほかにこのように問答によって表現される説明文があると考えられる。この問答型は西鶴が好んで多用する会話文によるものであり、会話によって具体的に表現することを通して究極的にはある種の事がらについて説明するものである。会話には動詞文を使用することが多いが、その内容は叙事を目的とするものではなく説明を目的とするものと考えられるので、この類を説明文の一種として考慮したわけである。

一対一で対話をする場合、一方が問い一方が答えるという場

合がある。それは普通質問者の質問事項について解答者が答える形で、それについて説明することになる。たとえば、問い「確定申告は何月何日までにするのですか」、答え「確定申告は三月十五日までにすることになっています」の如きである。問いも答えも動詞文でなされるが、実質は説明なので、ともに超時間的に表現される。私の言う問答型説明文とはこの類を言う。動詞は時間的範疇に属する概念を表現する。それで、動詞には時制的表現が連結しやすい。それに対し形容詞は超時間概念を表現する。それで、形容詞には時制は結び附かない。結び附けるには補助動詞「あり」を介在させねばならぬ。作家には動詞的表現を好む人があり、また形容詞的表現を好む人がある。西鶴は概して動詞的表現を好む作家と言えよう。「一代男」には叙事文は多いが形容詞的説明文は少ない。巻六に散在する遊女品定め文はその数少ない形容詞的説明文と言えよう。この遊女品定め文には無時制文が多い。私事にわたって恐縮ながら、私はかつて「一代男」全巻を時制との関係で検討した際、無時制文の存在に気付き、それからある種の既成の転合書の内容に思い付いたわけである。私にとって無時制文の発見は私の「一代男」の成立研究における一つの開眼の如きものであったし、そこからその解明の手がかりが一つ出てきたのであった。

問答型説明文を探究することは、本来西鶴の修辞法の一つを解きあかすことであるが、それは同時に西鶴の文体上の一手法を解きあかすことにもなる。それは更に「一代男」の個々の章の構成法を解きあかす一助にもなる。というのは、私の考えでは「一代男」の諸章の中にはその一部がこの問答型説明文によって構成されているものが多数あると考えられるからである。

「一代男」の諸章の多くは、私の言う既成の転合書中の小断片の編集によってその根幹が成立したと考えられるが、それらの中には問答型説明文が重要な要素をしめると解すべきものが多数あるし、そのことは本作品の成立経緯を仔細に検討する上で看過できない現象であると考えられる。また私が「一代男」に多数存在する問答型説明文の一種に過ぎないと推定するものが、その問答型の類似のために、論者によっては当該作品は古典の雛案であるなどと解説され、通説となつていっているものもある。たとえば二ノ一「はにふの寝道具」を謡曲「花月」の雛案と解する如きである。それらのことを考慮に入れるなら、問答型説明文の解明は「一代男」の成立経緯を考える上にきわめて重要な作業であると言わねばならない。

西鶴は具体的描写の巧みな作家である。その具体的描写には種々の方法があり、既述の女性描写法もその一種であるが、会

話文の使用もまたその一種である。会話は多くの場合具体的な事物・出来事などについて具体的に語り合うものだからである。それで、会話文を使用しながら行なう解説を聞いていると、聞く者もまさにその場にいるような臨場感にさそわれてしまいがちである。西鶴は平生もそのような話術で人を酔わせていたのであろう。それがおのずからその作品に現われ出たのであろう。会話文の種々は西鶴の個性を最も端的に露出させたものであろうと推測される。

現代の作家にも会話による表現の巧みな人とさほどでもないと思われる人がある。もつとも同一の作家でも、会話による表現を重視している作品とそうでないものがあることはよく知られている。それでも、概して会話の巧みな作家とさほどでもない作家との存在はよく言われていることである。一体に、会話の多い作品は具体性に富み、細部の表現がすぐれ、感性の流露する作品になりえており、そうでない作品は抽象的であり、概念的であり、客観的であるといふことの多いものである。そのことは古典についても同様であるべく、「一代男」は会話の多い作品の効果を十分に備えている。

会話といふことをどのように定義し分類するかといふことはむづかしい。西尾実氏は「日本人のことは」(岩波新書)で、普



通に会話と言われるものを「談話」とされ、それについても更に「対一」におけるものを「対話・問答」、一対多におけるものを「会話・対談」、一対象におけるものを「独語」と定められた。そのようなことを含みとしながらも、当面は「一代男」の文章について考慮するという臨時的な観点からごく通俗的理解に従って会話という用語やその他の用語を使用し、必要に応じて臨時的にその用語の規定をするというふうに行いたいと考えている。ここに言う会話は西尾実氏の用語では「談話」に当たるわけであり、会話文とはその談話の中の一単位を表わす場合とその談話全体を表わす場合とがあることになる。談話中の一単位とは文章中の一段落の如きもので、会話の進展中の一まとまりを表わすものと考えるが、当面する西鶴の間答型説明文においては、問いと問いに対する答えとの一組を一単位とするものや問いと答えとそれについての感想(世之介の感想であり、同時に作者の感想であるということが多い)との一組を一単位とするものなどがある。また形式的には感想は地の文で示されるのが普通であるが、問いや答えが会話の形式ではなく、地の文で表現されるということがあったり、問いや答えになることを示す辞句、たとえば「と聞えば」とか「と答えける」などの辞句の完備するものもあるが、それらのいずれかもしくは

ともに欠く不完備なものもある。それらの形式的な点がこの作品の成立経緯やもとをただせば既成の転合書の原因とどうかかわりあうかなどのことはまだ探究していない。

問答型説明文が問いと答えとの一組を中心とする場合は、文章構成上次のような職能を分担させられることが多い。即ち、叙事の進展の中で情況説明の職能を分担させられ、その説明文を契機に叙事が転換する。叙事が地の文の形で進展する中で、会話文による説明が入ることになるが、それが会話文という形を持つため、非常に具象性を増し、臨場感を強め、場面の転換が鮮明になる。たとえば二ノ一「はにふの寝道具」では、初瀬詣の帰途に仁王堂で世之介は若衆盛りの男性が下人に身づくろいをしてもらう光景をかいま見て不審の念を抱くが、

懸る所にはと。尋ねられけるに。此里は仁王堂と申て。京大  
阪の飛子。しのび宿なると。よろつに付て。我しり貞に語り  
けるに。

と説明され、今まで色気の無い所に宿るのは旅なのでやむをえぬとあきらめていたので喜びいさんで飛子遊びに赴くことになる。また四ノ一「因果の関守」では横びんの無いのを咎められて入牢させられた世之介は、牢中の明り取りから隣の牢舎の女を見て尋ねる。

あれはと。尋ければ。連そふ。男憎みして。家出をせし。其首尾。あしき事ありとて。有のま、を語る。

それを聞いて世之介は心動き、天井の煤を揚枝につけて女に手紙を書き送る。そのように未知のことを問答の結果知り、それによって場面転換がなされるといふことになる。また、問答型説明文が二組あるいはそれ以上連続する場合には、それらが各章の本文後部を構成してその章の主題部となるということが多い。たとえば二ノ二「はにふの寝道具」の本文後部などがそうである。二ノ一では世之介は仁王堂の飛子と遊興するが、その後半の、本文後部は次のような三部に分けられる。第一部は寝所の場の場面描写、第二部は第一の質問を中心とするもの、第三部は第二の質問を中心とするものである。この問答型は、「問い十答え十感想」という型から成ると考えられる。

(一)よこ島のもめん蒲団に。せんだんの。丸木。引切枕。夏をのがれたる。蚊もあればとて。摺鉢に。すり糖を煙らせける。煙と思へば。是も伽羅のこ、ちして。おのつから近よる程に。ひぜんなをりて。いまだ。間もなき手を。うち懸らる。も。嬉し悲しく有ける。さて動なれば。尤愛しく。思はる。

(二)問——すきにし程は。いかなる里。いかなる国くを。廻

りけるぞ。

答——懸るうへは。つゝむべき事も。何ならん。我そもそもは。糸より権三郎殿にありしが。笛ふきの。喜八かたにわたり。宮島の芝居すきにさまよい。備中の宮内。讃岐の金毘羅に。ゆく事もあり。いづく定ず。すみよし安立町に隠れ家。又は河内の柏原。此里にきて。今井多武峯の。出家衆を。たらし侍る。中にも更に。なさけなきは。八輪の学仁坊。まめ山の四郎左衛門とて。無類の此道好是は飛子の。うき灘を越るがごとし。此兩人に揉れて後。此動ならざるといふ事なし。或時は片山陰の柴かりて。適く手にふれし。銀子をしてやり。浦人の塩馴衣を。はだかにして。仮にも取ル分別計。情なきは衆道こゝろは。外になりましてと語る。

感想——皆うそにしても。偽とも思はれず。

(三)問——さて心にそまぬ人に。あふ夜はと尋ね侍れば。

答——譬ば。眠足一代に。齒杖つかはざる人にも。いやとはいははじ。それのみ。宵より秋の夜の明るまで。とやかく。おもふ儘に成こそ。無念いくたびか。人しらぬ泪にして。かく年月やうく。程ふりて。くる年の四月には。身自由なると。思ふをたのしみ。心いはるに然も。明後日ち金性

の者は。有卦に入ます。年の七年は。仕合と申侍る。

感想——金性ならば。廿四の金か。我とは十違ひぞかし。

二ノ一は謡曲の「花月」などの雛案と解説されることが多い。

野間光辰氏や日本古典文学大系「西鶴集上」の「一代男」の頭註者などしかりである。それは「花月」に問答の条があるため、形式の類似からそのように比定されたものであろうが、それ以上、「二代男」に会話文の多いこと、ことに問答型説明文という文種があり、それによって構成される章がほかにも若干あることなどを考慮に入れれば、これは古典の雛案によって解説するより、問答型説明文ということにしておく方が、西鶴の作品としては自然であるように考えられる。古典の雛案ということとは、野間氏もかつて言われたように、雛案ということが読者には容易に理解されるほど衆知の作品であることが大切であると思われ、また西鶴には古典の雛案をそのような条件に適合するよう行なう風があるように思われる。それらのことからして二ノ一は「花月」との関係から解説するより、問答型説明文によって解説する方がすぐれていると私は考える。なお、一ノ七「別れは当座はらひ」や、三ノ三「是非もらひ着物」の後半の、私の言う本文後部などは同様に問答型説明文の二組以上の連続によって構成されたものと解釈できると思う。なお、その問答

型説明文も「一代女」ではなくなる。「二代男」以後の作品では概して会話文が少なくなり、その用法も変化しようである。